

報道関係各位
Press Release



2026年3月19日
コグニティ株式会社

【調査報告】WWDC2025 Keynote分析で見た「直線設計」

— Apple Intelligence時代への次世代移行を“横に逸れず”高密度に伝えるプレゼン構造 —

知識表現AIを用い、会話・文章情報から組織課題を可視化するコグニティ株式会社（本社：東京都品川区、代表取締役：河野理愛、以下「コグニティ」）は、Appleの開発者会議WWDC（Worldwide Developers Conference）における WWDC2025 Keynote を対象に、発話の構造を定量化して分析したレポートのサマリーを公開しました。

WWDC2025を定量的にみると、際立つのはストーリー展開の「直線性」です。特許技術のストーリー展開分析から、WWDC2025は論点を横に広げるよりも、主線に沿って重要要素を順に説明する構造が強いことが分かりました。さらに、話題構成でも「説明の少ない話題 1件」にとどまり、重要な話題を提示したまま放置しない設計であることが示されています。

一方で、WWDC2025は情報量が多い回でもあります。話すスピードは402.3字/分と速いにもかかわらず、1000文字あたりの指示語は5.9回、フィラーは0という結果でした。つまり、情報量を増やしても冗長さや曖昧さを増やすのではなく、整理された主線の上で高密度に伝えるプレゼンとして設計されていることが示唆されます。



■ 調査の背景

近年のテック企業のKeynote（キーノート）は「伝える情報量」が増え続け、話量やスピードを上げて「理解が追いつかない」という課題が顕在化しています。コグニティは既報

で、大量情報時代の届け方には「ライブの即興」と「収録のコンテンツ化」という2系統があり得ることを示しました。

本稿では、その枠組みを踏まえつつ、WWDCの最新回であるWWDC2025を分析し、「情報をどう届けるか」に加えて「何を主線に置いて語るか」という観点から、プレゼン設計上の要点を整理します。

* 既報

- ・【調査報告】CESのキーノートを分析すると10年で200%以上成長する企業の共通点が見えてくる：<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000043.000012053.html>
- ・【調査報告】CES Keynote 予測分析で分かった“高成長企業の分岐点”：<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000047.000012053.html>
- ・【調査報告】Apple WWDC2020 × CES高成長企業キーノートで「届け方の2系統」が判明：<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000051.000012053.html>

■ 分析の概要

本分析は、コグニティの特許技術CogStructureを用い、Keynoteの発話を構造化して比較可能な指標に変換します。比較指標は、話量（文字数）、話すスピード（1分あたり文字量）、指示語・フィラー、ストーリー展開（直線／枝分かれ／複数オプション提示）、話題構成（説明の回収状況）などです。

※本リリースに記載する数値は、コグニティの調査によるものです。

■ 主な結果①：WWDC2025は“横に逸れない”直線設計

WWDC2025を分析した際に最も特徴的なのは、ストーリー展開の「直線性」です。複数の論点を横に広げるのではなく、主線に沿って重要要素を順に積み上げる構造が明確で、聞き手が“今どこを聞いているのか”を見失いにくい設計になっています。

総合分析では、WWDC2025は「直接的展開 10.0／枝分かれ展開 2.0／複数オプション提示 0.0」となり、あえて枝分かれや選択枝比較を増やさず、主線の理解に必要な要素を順に並べる傾向が強いことが分かりました。情報量が増える局面ほど、論点を増やすよりも“主線の固定”が効く——WWDC2025は、その設計が構造として表れた回と整理できます。この直接的展開は“主線に沿って説明が進む度合い”、枝分かれ展開は“論点が横に分岐する度合い”を表します。



図1：ストーリー展開の比較（WWDC2010・2020・2025）

【図の見方】直接的展開＝主線に沿って順に積み上げる進行。枝分かれ展開＝主線を保ちつつ説明を分岐して回収する進行。複数オプション提示＝選択肢を並べ比較させる進行。

【読み取れること】WWDC2025は「直接的展開 10.0 / 枝分かれ展開 2.0 / 複数オプション提示 0.0」と、横に論点を拡散させず、主線で重要要素を順に積み上げる傾向が強い。

【示唆】情報量が多い発信ほど、論点を“増やす”のではなく、主線を“固定”して積み上げる設計が効く。WWDC2025は、その「主線固定」の強さが構造として表れた回である。

次に、この「主線固定」が情報量の多い回でも破綻しにくい理由を、話すスピードと指示語・フィラー（言語ノイズ）の観点から確認します。

■ 主な結果②：話速402字/分でも“曖昧さを増やさない”

直線的に積み上げる構造が「高密度でも破綻しない」ことを、話速と“言語ノイズ”の観点から確認します。WWDC2025は、情報量を高めるために話すスピードを上げている一方で、曖昧さや冗長さを増やさないよう、指示語やフィラーといった要素が強く統制されています。

具体的には、話すスピードは402.3字/分と速いにもかかわらず、1000文字あたりの指示語は5.9回に抑制され、フィラーは0でした。つまり、速度を上げて“詰め込む”のではなく、収録コンテンツの編集によって主線を崩さず高密度化する設計が成立していることが示唆されます。ここは既報で整理した「収録のコンテンツ化」というWWDC型の届け方とも整合します。（以下の図2、図3、図4にて説明）

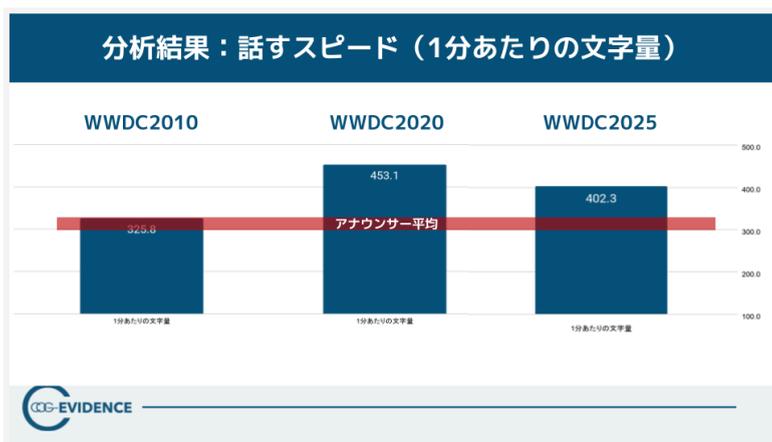


図2：話すスピード（WWDC2010・2020・2025比較）



図3：指示語（WWDC2010・2020・2025比較）



図4：フィラー（WWDC2010・2020・2025比較）

【図の見方】 話すスピード＝1分あたりの文字量。指示語＝1000文字あたりの指示語回数。フィラー＝不必要語句・クセの検出数。

【読み取れること】 WWDC2025は話すスピードが402.3字/分と速い一方で、指示語は1000文字あたり5.9回に抑制され、フィラーは0であった（参考：WWDC2010/2020側は1000文字あたり指示語合計9.3回）。

【示唆】 “速い＝雑”ではない。話速を上げるほど、指示語やフィラーの抑制は効いてくる。WWDC2025は、速度と明瞭性を同時に成立させる「編集された高密度設計」として位置づけられる。

続いて、重要な話題を提示したまま置き去りにしないための「説明の回収」がどの程度設計されているかを、話題構成から確認します。

■ 主な結果③：主線は“Apple Intelligenceを核にした次世代移行”

直線性の強い構造が「重要話題を置き去りにしない」形で回収されているかを、話題構成から確認します。情報量が多いプレゼンでは、話題提示だけが先行し、説明が追いつかない状態になると理解が破綻しやすくなります。そのため、話題を提示した後に根拠・理由・具体化を付与して回収しているかが、伝達設計上の重要な差分になります。

WWDC2025は話題数36件のうち、説明のある話題が35件、説明の少ない話題は1件にとどまりました。つまり、主線に沿って要素を積み上げるだけでなく、提示した重要要素を“置き去りにせず回収する”往復が設計されていることが分かります。これにより、高密度であっても「理解が追いつかない」副作用を抑えている点が、WWDC2025の構造上の特徴です。

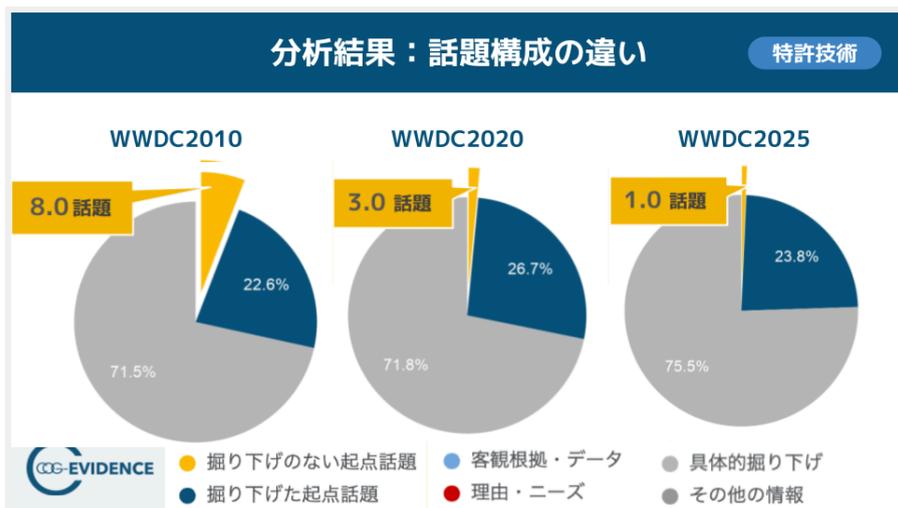


図5：話題構成（説明のある話題／説明の少ない話題）

【図の見方】 検出された主要話題を、話題提示後に根拠・理由・具体化が付与されているかで分類。

【読み取れること】 WWDC2025は話題数36件のうち、説明のある話題が35件、説明の少ない話題が1件にとどまる。

【示唆】 情報量が多い回ほど、視聴者は「話題を出したまま置き去り」にされると理解が破綻しやすい。WWDC2025は、話題提示→説明回収の往復が設計されており、“詰め込み”の副作用を抑える構造になっている。

■ 考察／コグニティの示唆

＜WWDC2025は、AIを基盤とする次世代移行を「主線で語り切る」回である＞

WWDC2025で直線性が強く出た背景には、「何を主線に置くか」が明確である点があると考えられます。分析で得られた主なトピックの内容から示唆されるのは、中心にあるのはApple Intelligenceを核に、iPhone、Apple Watch、Apple Vision Pro、Mac、iPadを横断して次世代へ移行させる構想です。そのうえで、プライバシーを保護したAI活用、デザインとプラットフォーム間の一貫性、さらに開発者向けのセッション／ラボ／各種API・フレームワークを通じた展開が、主線上の“成立条件”として位置づけられていました。

コグニティは、こうした構造を「内容のよし悪し」ではなく、伝達設計として再現可能な形に分解します。情報量が増える局面では、論点を広げるのではなく、主線を固定して重要要素を順に積むこと、そして話題の回収（説明を置き去りにしない）を設計することが、理解と納得を両立する鍵になります。これは、既報で示した「収録のコンテンツ化」という届け方とも整合し、WWDC2025はその設計がより先鋭化した事例と整理できます。

■ 分析レポートについて（限定公開）

本分析の詳細版（構造図、比較観点の定義、抽出ルール、参考図表を含む）は限定公開です。技術プレゼンに関係する皆様には、高成長企業の事例から得られる「伝える技術」に関する情報を共有します。取材・内容確認・レポート閲覧をご希望の方は、下記お問い合わせ先までご連絡ください。

*お問い合わせ先：<https://cognitee.com/contact>

*本リリース中で言及している会社名・製品名は、各社の商標または登録商標です。

*本分析は発信構造の比較であり、特定の企業・人物の優劣を断定するものではありません。

■ トライアルのご案内：Baseline Review機能

コグニティは、会話・文章などの定性データを、独自の構造化技術により「改善に使える指標」と「行動に落ちる示唆」に変換する分析サービスを提供しています。商談・会議・社内共有・研修・顧客対応・IRなど、目的に応じてコミュニケーションの“伝わり方”と“成果につながる要因”を可視化し、改善の優先順位と打ち手を提示します。

その入口として、短期間で現状の課題と改善の方向性を把握できる「Baseline Review（お試し）」を5万円（税別）で2026年1月27日にリリースいたしました。個人・組織の力量を確かめるため、パフォーマンスが良いトーク/悪いトークの違い（構成・論点の置き方・説得の流れ等）や最終版の再レビュー（Before/After比較）として、録画・音声・書類等を2本ご提出いただくことで、分析結果とブリーフィング1時間でフィードバックします。（個人利用の場合は、ブリーフィングに代わりメールもしくはオンラインセミナーにて実施）



**組織判断は、
感覚で決めない。**

Baseline Review提供開始
2件までの個別検定+意思決定ブリーフィング

月30社 限定
初回5万円
(税別)

会議・商談・1on1・チャット・報告書
組織のリアルを定量化、要因抽出から成果検証まで。

申込ページ：<https://cognitee.com/baseline-review-cog-evidence>

【コグニティ株式会社 会社概要】

- 社名：コグニティ株式会社
- パーパス：技術の力で、思考バイアスなき社会を。
- 事業内容：定性情報の定量化技術を使った組織分析サービス
- 本社：〒140-0015 東京都品川区西大井一丁目1番2-208号
- 設立：2013年3月28日
- Web：<https://cognitee.com/>
- 資本金：6億円（準備金含む）
- 従業員：71名（リモートワーカー含む）
- 代表者：代表取締役 河野 理愛
- 受賞歴他：

■EY Innovative Startup エンタープライズ部門受賞(2019)

- 第11回 HRアワード 人材開発・育成部門 最優秀賞(2022)
- 第22回 一般社団法人日本テレワーク協会 テレワーク推進賞 優秀賞受賞(2022)
- 第3回TOKYOテレワークアワード 推進賞(2023)
- 一般社団法人生成AI活用普及協会協議員(2023～)

本件に関するお問合せ
コグニティ株式会社 広報担当：奥井
Email: okuinagisa@cognitee.com TEL: 03-4212-8445